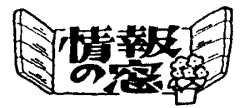


# 第19回 FMES・研連シンポジウム 「経営工学と企業の社会的責任 (CSR)」

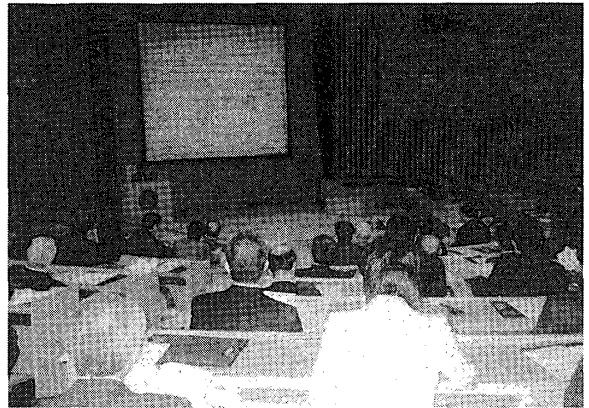


矢部 博 (東京理科大学)

さる平成15年12月5日(金)に、日本学術会議経営管理工学専門委員会とFMES(経営工学関連学会協議会)が主催する第19回シンポジウムが開催された。場所は日本学術会議講堂、テーマは「経営工学と企業の社会的責任(CSR: Corporate Social Responsibility)」で、参加人数は80名を超えた。FMES・研連シンポジウムは、FMESを構成する9つの学会(日本OR学会もその1つ)が交替で幹事をして毎年1回開催される。今回はプロジェクトマネジメント学会が幹事学会であった。

米国におけるエンロン、ワールドコム不正決算、我が国における食品メーカーをはじめとした企業内不祥事が相次いで明るみになるにつれ、企業の信頼性を回復するためのコンプライアンスの確保が問題になってきた。こうした企業を取り巻く環境の変化にともなう、近年CSRという概念が注目を浴びている。CSRとは「財務的側面で株主に報いるだけでなく、法令遵守・環境保護・人権擁護・労働環境・消費者保護・社会貢献といった社会的側面でも責任を果たそうという経営理念である」といえる。今回のシンポジウムでは、こうしたCSRの考え方、動向、実現にむけての苦労話などを聞くことができた。

まず、久米均氏(日本学術会議第5部部長)の開会の挨拶から始まった。FMESの活動報告、第19期日本学術会議にむけての説明の後、本テーマに関する概論が述べられた。そしてウラン燃料加工工場の違法操業などにみられるように、技術者の倫理が問われている昨今、経営工学関連でも倫理規程の設定を検討してはどうかとの提言があった。続いて4件の特別講演があった。まず、斎藤敏一氏(株ルネサンス)より(株)経済同友会が2003年3月にまとめた第15回企業白書『「市場の進化」と社会的責任経営』に関連した講演があった。あらためて企業の社会的責任を検討する理由や21世紀の企業のあり方について意見が述べられた。次に、矢野友三郎氏(経済産業省)が「CSRとISO(国際標準化機構)」について講演した。2001年の



ISO理事会や2003年のエビアンサミットでもCSRについて議論されたこともあり、今やCSRは環境問題とならんで日本企業から最も熱い視線が注がれているという。こうした状況下で、CSRについて検討している国内外の委員会の動向が詳しく紹介された。3番目の首藤恵氏(中央大学)の講演は、機関投資家のコーポレート・ガバナンスと社会的責任投資についてであった。英国年金基金のコーポレート・ガバナンス行動と社会的責任投資に対する公共政策の役割と、それを社会的責任投資に結びつけるメカニズムについて詳しい説明があった。4番目の講演は宮地敏通氏(日本ハム(株))によるもので、いわゆるBSEに関連した買い上げ事業の不祥事に対するその後の社内の取り組みについて報告があった。一度失った信用を取り戻すことがいかに大変かを改めて実感した次第。起こってしまった不祥事は許されるものではないが、その後の真摯な取り組み方に企業の誠実さが感じられた。最後に、プロジェクトマネジメント学会会長河合輝欣氏の閉会の挨拶で5時間におよぶシンポジウムの幕を閉じた。企業のモラルと社会的責任のあり方を考えさせられた一日であった。

なお第20回シンポジウムは、我が国OR学会が幹事になり今年の7月9日(金)に日本学術会議講堂で「経営戦略とリスクマネジメント」というテーマで開催される予定である。